
建国の記念に

かりがね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
建国の記念に

【Nコード】
N5797P

【作者名】
かりがね

【あらすじ】
詩人の死が世界を動かす。

序章 世界へ

西居琴音は大きなスポーツバッグを持っている。中に入っているのはお気に入りの白いドレス、着替え、化粧品一式、日本から持ってきた妊娠検査薬一ダース、高校の後輩から買った純度の高いヘロイン。だが海外旅行はそれほど彼女を奔放にさせなかった。彼女は二日で銃を買うことを決意して、一週間後にサングラスと一緒にMP5を買った。ドイツ製の高性能サブマシンガンは自衛のために一度発砲した。

日本脱出にはそれほど資金はいらなかったと西居は顧みた。先進国に行く場合はお金がかかるが、後進国に行く場合はそれほどお金がかからない。ローカル・コスト・エアキャリアというシステムのおかげで、西居は二八〇〇円で海外に渡ることができた。

彼女はケータイのサイトに貼られた低予算での渡航案を、現代社会の地図帳で見比べながら検討した。サイトには現地の人たちのコメントが貼られていた。安全なルート、入国の方法、それらすべては自動翻訳されていた。そして必ず日本人によるルート開拓があった。新たなルート、利用法が、まるで登山を競うようにサイトに貼られ、それを見るたびに西居は思った。

次は私だ。

コンビニでのバイトで目標額の一〇万は早速たまった。最初はインドネシアにした。インドネシアは古くから難民受け入れに賛同していて、今もパキスタン難民をピストン輸送しているという。ということとは、インドネシアからパキスタンへは行きやすいということだろう。コンビニの店長に電話でバイトを辞めることを伝え、空港への電車に乗った。地方空港は空港使用料が安く、発展途上国への海外旅行は地方空港がメインになっていた。

西居は深く考えず、ただ目的地へ行くことだけを企んでいた。眩しい朝日に目がくらんで、サングラスをかけた。安っぽいホテルに

アメリカ人のバックパッカーと一緒に泊まって、親に買ってもらったローリースケートでバンドルランブンを港を目指している。ガタガタのコンクリートに悪態をつく。もしかしたら、歩かなくちゃならないかも。

港からのトラックの行列に道を阻まれたので、ケータイのサイトで情報をチェックすることにした。サイトには今日も世界のニューヨークが事細かく報道されていた。世界的な混乱で農作物の値段が高騰。インドではファーストフード以外は腹が下る危険大。胃腸薬は持ってきていたので、西居は安心した。

サイトに書き込む。

銃を買いました。これからパキスタンに向かいます。

あらゆる文化は融合の洗礼を受けるべきである。そう言い残した詩人が死んだ。死を悼んだものは推定八〇〇〇万人。日本を代表した巨人の死だった。

テレビは連日特番を報道した。詩人の最期、言葉、映像が集められ、やがて、文化の融合というテーマだけが浮き彫りになると、「ロリコン連隊」と自称する男女四〇〇〇名が海外に渡航した。平均年齢は二一歳、フリーターやニートだったものがほとんどで、彼らは自らを「文化融合の使者」と表現した。

それがはじめだった。ロリコン連隊のうち一年間の海外残留を果たした二〇〇名が「手にいれるもの」という合言葉を用いて、独自の活動を開始した。

西日本は激闘の時代に突入していた。

急増した移民の未来を新たな移民国家形成とみなした人々が、山口県において新国家を建国した。名称は「宗賀」。宗賀は日本が成し得ないことを実現していくと発表し、共産主義と資本主義の融合形態であるプラウト資本主義を採択した。

日本政府として独立を認めないという声明が与党から発表されたり、主な動きはなかった。その翌日、北朝鮮からボート・ピープル二万人が宗賀に密入国した。二万人は北朝鮮からの脱北者であり、宗賀の建国に尽力する誓いをマスコミにアピールした。同時期に大阪では宗教法人と警察とのあいだで戦闘が発生し、戒厳令が達せられた。

宗教法人「銀翼」はキリスト系のカルト教団で、軍崩壊が起こったミャンマーから元軍人の男達を引きぬき戦闘部隊を設けていた。部隊は銀翼内で「防衛」と呼ばれた。警察と、防衛がマスコミにより発覚した後は自衛隊も動き出し、主な銀翼支部はそれによって壊滅したが防衛は生き残った。彼らは西日本の山岳地帯に逃亡し、過疎地帯の老人を襲撃する事件を連発した。警察や自衛隊は凶悪犯罪に対して数度の山狩を行ったが、決まって夜間にある狙撃や爆弾テロによって防衛の壊滅には至っていなかった。

防衛は宗賀の援助を受けているという噂が流れだした頃、日本国内の移民者が暗殺者によって見せしめられ殺される事件が頻発した。東京、埼玉において移民者のマンション、移民支援団体の事務所が放火された。淡いパーマの髪を真っ赤に染めた文芸評論家が「水も安全も有料になった」と発言し大きな議論を呼んだ。

若者の間ではかつてからの政治不信から、もはや日本という国家に将来はないという風潮が発生し、海外へ渡航する例や自殺する例が急増した。やがて警官がアサルトライフルを持って巡回するよう

になったころ、京都在住のアーティストが独自の文化論を発表した。若者たちの海外流出はインターネットを通じた日本文化の洗練につながっていた。彼女は海外経験こそが日本文化再興の手段と断定した。

その後まもなくして陸上自衛隊西部方面隊が決起し、大量の砲弾を山口に向け発射した。

海野桃胡うみのもこしはかつて水鳶みずしまろることとしてアイドル事務所の養成コースに参加していた。事務所は当時売れっ子だったアイドルグループが所属していたところで、海野はそのグループに入れる可能性にかけた。青春の全てを費やす覚悟はあった。練習は過酷を極め、海野は黙々とそれを乗り越えた。だが、予想外に終わりはきた。

アイドルグループのひとりに妊娠騒ぎが発生し、その直後行われたコンサートでは興奮した暴徒たちが会場のスタッフ、警備員を撲殺する事件が発生した。暴徒はアイドルを集団で暴行した。警察はアサルトライフルによる射撃を行い、たくさんの死傷者をだしながらも事態を収拾した。それでも事務所は廃業を余儀なくされ、彼女は夢を閉ざされた。

その後彼女はインドへ渡航した。主にインド、中東アジア、アフリカにおいて日本人アーティストは優遇されていた。彼女は本名でギターの弾き語りをはじめ、ニューデリーで慎ましい音楽活動を送っているさなか、手に入れるものの派生である「建国軍」に参加した。建国軍は手に入れるものが分裂し、分裂した組織がビジネスや貧民救済に向かっていく中も、文化融合の理念を保持し続ける細胞組織だった。メンバー数は二〇五四名。

西居琴音は数週間前からすでに建国軍に参加していた。彼女が日本を脱出してから五ヶ月が経過していた。日本は数力国に分裂して、経済や宗教を同一とする日本文明圏が誕生していた。父親は二番目の日本の国家公務員に再就職し、母はデモ行進の途中に警官隊が撃った催涙弾で死んでしまったらしい。建国軍参加の際に血で汚れた白いドレスを燃やしたという逸話が彼女に残っていた。

四

イギリスではEUからの脱退を要求する武装組織が連続爆破テロを行っていた。メンバーは若いインテリ層で、EU議会支部、理工大学のカフェテラス、ロンドンのタクシーを相次いで爆破した。

ヒースロー空港には建国軍のメンバーがたどり着いていた。今回のイギリス遠征のメンバーは一九名だった。建国軍はこれから別組織である「ユナイテッド・カミング」と共に作戦を開始する。

西居と海野は恋人同士になっていた。建国軍の副業の一つである移動式のカフェのフロアを任されているうちに、日本人同士でありながら戻る場所がない二人は互いに惹かれあつた。武器携帯が許可されるようになったイギリスにて携帯の申請を行う。中東をさまよひ、イスラエル崩壊の激戦を経験した西居はアサルトライフルにこだわつたが、外国人には一級銃火器の許可はおりず、しかたなくP90というサブマシンガンを手にした。海野はさしあたりのない拳銃をピンクのポーチにしまいこんだ。

タクシー業界の一斉ストライキのためにタクシーは空港に着いていなかった。ユナイテッド・カミングの方で大型バスをチャーターしてきたという知らせがあり、一行は空港で数時間待った。テレビではテロ組織に対する心理研究がなされていた。自爆テロ未遂により逮捕されたアメリカ人留学生は秩序の完全破壊こそが新たな創造を産むと固く信じていた。

到着したバスは日本の長距離移動用のものだった。二〇〇〇年代に走っていた記憶があるとメンバーで話題になった。側面には中国語の企業の広告がかかっている。ユナイテッド・カミングは三人で一人はリーダーである日本人の男性、そして二人はインド系の女性だった。バスはのろのろと出発し、目的地に着いた頃には夜も更けていた。

目的地についてからユナイテッド・カミングはバス車内に残るこ

とになった。建国軍メンバーは周囲を警戒した。一人が現在地を詳細にブログに記入し、ポッドキャストにて海外に映像を配信した。他のものが銃を持って周囲を確認した。ロンドンから少し離れた地方の大学だった。一室から明かりが漏れ華やいだ声が響いている。

警戒を解かぬままその部屋に向かう。玄関や廊下にだれもいない。部屋では最新のホログラムのプロジェクタが中央に据えられて、美しい海の映像が全面に写っている。声はスピーカーの放送だった。一気にメンバーは緊張した。クジラのホログラムの後ろに、携帯電話をもつ男がいる。ヒゲを伸ばす若い大学生。傍らの床にはマットレスが敷かれて、その上にサンタの帽子を被った上半身裸の女がいた。イギリスでは珍しい黒髪の女の横には大量の高性能爆薬があった。

男が間髪入れずボタンを押した。女の方を振り返りもしなかったし、女もその怠惰な表情を動かさしはしなかった。発見してから一秒もなかった。轟音と衝撃があった。

五

日本でなぜ戦乱が自然発生したかが盛んに議論になったが、やがて思想家たちが「行き過ぎた議論は危険だ」と警鐘を唱え始めた。理論に暴力装置が隠されている、という予言があった。

中国共産党幹部の一人が自身の正義に基づき、イラク戦争時に人民解放軍緊急展開部隊が米軍特殊部隊と戦闘したと密告した。米軍特殊部隊がイラク国内に大量破壊兵器を運び込もうとした「エンジエル・チヌーク」作戦のことだったので、米政府は妄言であると断定し、中国に対して示威行為を行った。

イタリアではイタリア医師連合が至上の医療を目指すと宣言し、政府認定による医薬品から外れたものも利用する方針を出した。またマフィアは救われないと宣言したことで、病院が銃撃されたり放火される事件が多発した。裕福なものは国外に逃げたが、国際問題と化したこの騒動に終わりはなかった。

手にいれるものは果敢に参加した。マフィアの妨害を越えてイタリアに日本の医薬品を届けるのは手にいれるものしかいなかった。南極国家誕生のときは最後まで国家否定派にいた。政治も戦争もビジネスも思想も利用した。世界は究極の姿を表しつつあった。

六

西居は意識が戻ってから、上にかぶさった体をのけた。海野桃胡だった。なんども愛しあつた体、貪った唇はいびつに歪み、足はなかつた。通路で発砲音。ジャルと呼ばれるイスラエル人、イラク民主国の経済成長を夢見ていた男が撃たれた。海野の体を盾にして寝そべつたまま発砲した。敵からの銃撃は止んだ。海野は死んでる。その結論が妥当だった。

ジャルの血が噴き出る腹を見た。警察がくるはずだ。山田さんがフルオートの拳銃を構えながら突撃した。カメラを構えていた北欧系の一六歳の女の子が復帰した。録画したままになっている。

「テロ過激派たちの説得に向かった先で銃撃を受けました！これから撃退します。以上建国軍！」

七

警察の話によると、襲撃に参加したものはテロリストメンバーは九名、画策、準備した者は二三名にのぼるといふ。救急車がひっきりなしに出発する駐車場で、どこもたいした怪我がなかった西居は警察官の説明を聞いていた。西居が籍をおく第二日本はまだEUと国交を結んでおらず、病院で治療を受けられないということもあった。

「西居？西居いる？」

流暢な日本語だった。一瞬、葛藤と切なさが過ぎつた。男の声だ。「俺だよ。わかる？」

狙撃ライフルを担ぐ、特殊部隊の服装をした男がいた。前に見たことがあるかもしれない。そんな程度だった。

「同じクラスだった吉野なんだけど」

覚えはなかった。あれほどクラスメイトの名前を覚えていたのに吉野は狙撃ライフルをおいて、ズボンのポケットからメモを取り出した。

「建国軍リーダーが死んだから、あんたが最年長の日本人になるわけで、建国軍の暫定リーダーは君なんだって。それでこの書類」

吉野の左目は裂傷で窪んでいた。残った右目は彼女を直視しない。五ヶ月のあいだの、吉野と名乗る男に何があったのか。イギリス政府とどう関わっているのか。西居はメモを見た。

「よくこういうことやるんだけど、多分詩篇だと思っぜ」

終章 建国の記念に

「建国の記念に」

西居がつぶやいた。吉野はその中身を見たことがない。それは各組織のリーダーしか見れないものだった。ところが西居はそれをポケットに無造作に突っ込んで、歩き出そうとする。いつだって彼女はそういう強さがあると吉野は思った。

「読まないのか」

「死者が書いた文章に踊らされてるだけ。私たちみんなそう。ねえ、今日恋人が死んだのよ」

西居はサブマシンガンを担ぎ直した。歩き方は大きく変わったようだ。重たいものを担ぐ歩き方だ。

「待て」

西居は止まる。

「これだけは確認しなきゃならないんだけど、建国軍リーダーを継ぐか？」

「継ぐ」

間髪すらなかった。西居は再び歩きだした。吉野はドコモの携帯電話を取り出して、指示を出した男に西居が了承した旨を告げた。

男は流暢なイギリス英語を話す。それしか知らない。

「ねえ、私たちはどういう組織なんでしょう」吉野は気まぐれで聞いてみた。

「さあね、そんなことわからないよ。それよりついさっき、日本の関西政権が全世界に宣戦布告したんだけど。日本に仕事たくさんあるからね」

あ、そうだ。男は言った。

「あらゆる文化は融合の洗礼を受けなければならない。そしてあらゆる人は戦え。力の限り」

吉野は考えた。答えだろうか。

「箴言ですか？」

男は笑った。

「君たちを動かす詩人の言葉じゃないか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5797p/>

建国の記念に

2011年5月25日23時55分発行